

講義を聴いて思ふことを一言でも述べておけば、除染にかけていふ余計なコストを、荒木大農地の再生やその
とも農地の維持・保全を促すことに使えないものだろうか」ということである。東日本大震災の後、メディアが放射
線の影響、恐ろしい、それについて不安を述べる人々の姿を誇張して、またはその一面だけに注目して報道してい
ることも多い。私は法学部が他学部聴講していることにより、将来農業に関する研究をあることや農業自体に
携わることはないだろうから、被災地の農業再生のために技術的な貢献もすることは難しいと思う。ただ、放射
線についての正しい知見を持ち、できればそれを広めていくことについては、法学部で論理力を鍛えて、人を
説得できる力を身につけることで可能にしたい。それが間接的にはあるが、被災地に下げる正しいコ
ストのかけ方につながり、ひいては被災地の農業再生につながるものと考えている。

学生が何を学ぼうとしている、と思われるかもしれない。しかし私は下午は大人よりは放射線について正
確な知識を持っている自信がある。広島出身であることにより、原爆資料館に何度も足を運ぶ。展示や
説明を真剣に見る機会が多かった。そこで分かることは、確かに放射線は恐ろしいものだが、今の被災地
の状況は(放射線に関しては)過去日本が経験した二発の原爆に比べれば大したことはない、ということ
なのだ。今の日本では放射線と聞いただけで広島や長崎のようになると思っている人が幾分いる気がある。
被災地の土地に残ったおぼろげな放射能や、被災地の農作物を恐れ^{ヒヤッ}るのは、ガードレールのついた歩道
を走らなくて歩いていたりかご乗車運転の車が空、こんでくるという事態が恐ろしいから家から引きこもり、
と言うくらい馬鹿げているし、放射能による健康被害で寿命が縮む心配をするなら生活習慣病に
ならないよう気をつける方が全然合理的なはずなのだ。メディアの報道をうのみにする人が多すぎるのだ。
本講義のように科学的な事実をもとに正しく知るべきだ。このことを心の底から伝えたい。

ただ、残念ながら今の私には発言をしても人が振り返って耳を傾けてくれるほどの地位・立場が
無い。今の私にできる一番の近道は、東大法学部に求めたい勉強を確実にこなし、日々精進して
そのような地位に辿りつめるよう一歩一歩進んでいくことなのかもしれない。

7/22(火)の授業を聞き、溝口先生の農地除染に対する考え方およびその実践に大変な関心を覚えた。特に、現在の政府が莫大な予算をかけて非効率的な除染を行い、地元の農家の方々の心情をないがしろにしていると述べている点についてとても共感した。私は本講義において法学部の学生であるが、以前より農林水産業に興味を覚えており将来は農林水産業への入省を志望しているため他学部受講として本講義を受講させていただいている。そこで、以下では地元の農家の方々の心情を第一に考えるという先生の考えを踏まえたくて、私自身できそうな被災地の農業再生についての考えを述べていく。

先生の考えの中で私が特に賛同したのは、地元の方々の心情にあった除染を行うべきであるという学問を超えた人間的な考え方である。私自身は除染活動に関わることはできないが、このような被災者を第一にして彼らを支援するために私自身が出来る活動が以下の2つあると考える。1つ目は、福島県で生産された農作物を積極的に消費するようにすることである。現在福島で生産された農作物はいわゆる「風評被害」によって全国の消費者が購入を避けるようになってしまっており、このままではいくら福島の農業生産が復興をなし得たとしても、農作物が売れないことで産業が立ち行かなくなる恐れがあると思われる。そこで、一般市民である私がまず福島の農産業のためにできることは、彼らが生産した農作物を消費し、産業として成り立たせる手助けをすることである。2つ目は、福島の農業従事者に対する心のケアである。2011年の東日本大震災および福島第一原子力発電事故によって福島の農業は甚大な被害を受け、農家の方々にも大きな精神的ダメージがあると考えられる。それは、生活の糧を奪われたということもさることながら、これまでの人生をともしてきた農地が「汚染」という扱いを受けていることにも起因するものであると考えられる。そこで私は、福島県におけるボランティアに積極的に参加し、福島の農家の方々と直接交流を重ねて彼らの心情を和らげてあげたいと考えている。今年の夏にも、空いている時間を用いて是非ボランティアに参加して彼らとの交流を重ねていきたいと考えている。

本課題は、「あなた自身ができそうな」とある為、個人レベルとして被災地の農業再生についてできることについて考察するものであると解釈する。この課題については、例えば農学部の学生であれば技術的な物を言えるであろうし、そうでなければ現地でのボランティア等が一般的な答えとなるように思われるが、自分に特異的なものについて触れることが有意義であるように思われる。

私は、法学部所属であり、なおかつ弁論部に所属している。そのため、自分が被災地の農業再生について最も貢献できる分野は言論活動にあるように思う。一昨年の冬学期、農学部教授によるオムニバス形式の総合科目を受講し、バイオ燃料用作物を用いた農地再生について知識を得、昨年には育てるのに手間のかからないバイオ燃料用作物を用いた耕作放棄地の拡大阻止／再生に関する弁論を行い、当弁論大会にて準優勝を勝ち取った。このような形で講義で得た知識を基にした弁論を行うことで私は被災地の農業再生を公に対して訴え、その必要性や方法論を人々に伝えていくことによって最も貢献できるように思う。

さて、以下ではこのような形で私が公に対して弁論を行うに当たり、どのような内容を語るべきかということを考えて記すこととした。技術的な部分に関しては今回の講義の内容で説明があったように、汚染土の上に土をかぶせたり、水を張ったりすることにより除染することは十分に可能であることは理解できたが、農業を農“業”として復興するにあたってはそれが継続的に行なえ、なおかつ経済的に成立する必要があるといえる。これにあたっては今回授業で述べられたような技術が存在し、実際に効果があることをまずは公に理解してもらう必要があるといえる。そのため、政策弁論として、食料用作物ではなく、まずは燃料よう作物を被災地農業の復興の象徴とし、その安全性を国民に周知させるとともに農地の荒廃を防ぎ、安全性が確認された段階で従来型農業に回帰するという政策を提案してみたいように思う。おそらくは被災地農業に対する安全性というのはいくら論理的に語ったところである種原子力アレルギーのようなものにかかった国民の頭には届いても感覚的に理解することは難しいように思う。そのため、まずは理屈でなく身近に製品を浸透させることが重要であり、その上で適当なものは食べるものでなく使用するものであり、その一例として燃料を活用できればいいのだろうと思う。このような言説を展開することで少しでもこういった言説を浸透させることが私にできる農業再生への取り組みであるように考える。

私自身にできそうな被災地の農業再生は、正しい知識を得て消費活動を行うことに尽きると感じた。私には被災地に暮らす親族もおらず、恥ずかしながらボランティア等で現地に赴く機会も設けることができていないために、「被災地」は自分にとってどこか遠い存在であり、ニュースや新聞で目にするものという意識が強いことが否めない。今学期までは被災地についての情報はニュースや新聞で見聞きするものばかりで、何を基準にどこまで正しいことを言っているのかは疑問に思いつつも、鵜呑みにする危険性を認識するに留まり、自ら情報を求めることはなかった。今学期履修した講義の中には地域社会学をめぐるものであったり、食料流通工学の今回の講義であったり、東日本大震災の被災地を取り扱うものがあり、これまでの認識を改める必要性を感じた。国をはじめ行政機関が縦割りで動いていること、一度決定したことは覆されにくく、修正は困難であることなど認識していつつも、専門家が議論を重ねて決めたことならひどく不適切だということもないだろうと考えていた。しかし、現場を通していない専門家判断はやはり危険だと感じるようになった。地域社会の繋がりのかけがえのなさはやはり当事者でなければ真に理解することはできず、その地域で農業を続けることの意味も当事者でなければわからないだろう。私は社会学を勉強するようになって特に、すぐに現実に応用できそうな現代社会学理論であっても、やはり理論と現実には断裂があって、簡単にあてはめて現実を理解しようとすることはできないと実感するようになった。おそらく被災地の社会や農業を巡る議論でも同じことが言えて、どれほど学術的に正しくても現場への理解がなければ適切に活用することはできないのではないだろうか。当事者の主張ばかりを頼りに復興を考えることも危険だが、現場に基づかない理論による復興政策も不適切である。バランスが求められるが、今の状態は後者に寄っているのではないだろうか。大きなスケールで被災地復興を考えると、彼らだけが現場の目線で主張しても数が少ないために反映されないことも多いかもしれない。だからこそ、他の地域で暮らす私たちも当事者たちの考えていること、感じていることを知る努力をし、それらを尊重した政策が実現されるよう世論を形成していくことが求められよう。逆に短期的に、今すぐ私にできることは、冒頭で述べたように、正しい知識を基に、正判断し、被災地のものを消費することだと思う。「よくわからないが、確実に安全なもの」を選択する発想ではなく、被災地を少しでも支える意識をもって消費の選択をすることが私にできることだ。

被災地の農業を再生する上でまず考えなくてはならないのが放射能物質による汚染である。今日福島で起きた原子力発電所の事故は今の想定を越えたものとなっており、被害がどの程度であるか、ということが、相手が目に見えない放射能物質であることあって、分からない、推測するしかない、という現状がある。この場合で問題となるのが、対応の仕方と、風評被害である。風評被害は農業の再生において足枷となっているが、風評被害に対応するためにはまず何よりも、その風評が間違っている、ということを示さなくてはならないし、そのためには当然のことながら放射能物質汚染から解放された土壌を取り戻さなくてはならない。その上で、権威ある機関、人物が徹底して風評に立ち向かわなくてはならないだろう。では、汚染をどのように除去するか、ということが問題となる。考えることのできるのは表層土壌の除去である。様々な方法があるであろうが、私自身ができること、となる人手としての手段をしかてまないと思われる。持続的に広域に除染することはできないことを考えると私自身ができること、とは言えないように思われる。そこで現実的に考えられることとしては、何よりもまず「知る」ということが大事だと考えている。今日の事故が起ころうまでは、放射能物質による被害というのは戦時の原爆しか知らず、他のことは想像の範囲内ではなかったが、実際に事故が起ころうと再生しなくてはならない現状は、学ばなければならないとして、学びの機会であるべきである。考える知識を総動員させて日本全国を駆け回って挑んでいる今回の再生を見て聞いて、体験すること、将来の研究に役立てる。その研究を被災地の再生に役立てることが私のできる現時点での最大限の協力ではないだろうが、もちろんそのためには様々な知識を結晶させる現在の対応を手段を体験しなくてはならない。被災地の農業再生という課題は早急に解決の道筋を見つけなければならぬ類のものではあるが、同時に持続的に、そしてさらに今回以降も起ころうとする様々な災害にも目を向けなければならぬことを考えると、今の私にできるのは、焦

て、手足としての働きだけをする事ではないと考えられる。現時点での対応は今の知識者に任せて、未来の例えは解決の道筋がある程度見えた段階でのさらなる一歩入ったような、学びをすることか最善の一手ではあるのではないか。自分の研究も、被験者を知った上でそのものと、知識を得たものとしては、例え直接的な研究でなくとも、応用に対する発想、熟成という面で大きく価値の異なるものとなるだろう。

農学部生命科学工学

被災地の農業再生について私自身が出来ることは本当に微力なものでしかなく、考えられるのは科学的根拠に基づいて判断し、人の風評に流されたいようにするのと、実際の除染作業をお手伝いすることであるように感じた。震災から三年が経ち、風評被害はドンドンと収束してきているように私は感じていたが、まだまだ農業を元通りに行えるようにするための方法は多くいらっしゃるということに気がついた。それは除染作業を行ったとしても、その廃棄物を置くための場所がないことが原因であることも知っていたが、今回の講義で各農家が行える除染作業について知ったとき、大変驚いた。国の研究機関にお願いされた作業を国が行ってくれるのを待つ、という感覚ではなく、自らが行うことで自信を持って作物をアピールできることにもつながるだろう。そして研究者は研究の方法を提示するだけでなく、実際に一緒に行うということが重要な点だと感じた。農家でも研究者でもない私ができることは、不安感だけが福島産を忌避するのではなく、正しく判断して購入行動するということだと感じた。また家族といった身の周りの人がそのようにすることをしていたとしたら、科学的に安全基準を満たしていることを少しも伝え、臆然とした忌避をしないよう発信していきたく思った。また実際に農地に向き、現状を見て除染作業をお手伝いしてみたいと感じた。震災の悲愴を直視せずどこか他人事のように被災地での農業について考えたいけれども、もっと積極的に関わっていきたく思った。また今の日本・福島の状態だけでなく、将来の世界のどこかでも自分も同じように何か復興や振興の手段を提示し行動できる研究者になれるような知識を身につけ、実践を行っていきたいと感じた。今の自分は微力ではあるけれども、だからこそ力をかけて研究者として成長していきたく。